



遠藤健太郎
『イラン人 このフシギな人々』
彩流社、二〇一四年

小野 亮介

慶應義塾大学大学院文学研究科
後期博士課程

本書は二〇一一年頭から二年弱の間イランの首都テヘランに研究留学した著者の体験を五〇のトピックにわけて綴ったエッセイ集である。イラン留学生の手記というと、革命前イランにおける自身の研究生活と市井の人々を描いた岡田恵美子氏の『イラン人の心』（初版一九八一年）を思い浮かべるが、本書にはほとんど市井の人しか現れない。それもそのはず本書の主な舞台は、外国人はめったに足を伸ばさないであろう旧市街・大バーザールのほど近くにあるモストウフィーという横丁である。

著者は自身の研究対象である立憲革命期のウラマーが歩み、親しんだ風景を追体験すべくこの横丁に居を構え、庶民の世界の中へ入り込んでゆく。不動産屋のアクバル、串焼き屋のクルド人ジャマル、肉屋のマフムードじいさんといった横丁の面々とのやりとりから著者が見聞きし学んだこと、おせっかいをせずにはいられない彼ら

から暖かく迎え入れられたこと、彼らの素朴さや誠実さ、あるいは旅行先での風景、それらは美しい記憶として読者にも伝わるだろう。時おり語られる著者の失敗談も可愛嬌だ。

しかし本書の魅力はそれだけではない。むしろより重要なのは、喧嘩、口論、中傷、配慮のなさ、厚かましき、ペテン、男性の性欲の強さなど、およそ目を背けたくなるようなイラン人の負の側面ではないだろうか。しかし本書においてそれらは単なる愚痴ではない。著者は心乱されながらも、イラン人と向き合い、彼らの「フシギ」さをじつと冷静に観察し続ける。そしてその観察はやがて革命体制へと向けられるのである。本書のトピックの一つである「こんなはずじゃ」や、イラン人がよく口にするというフレーズ「王様がいたころはよかった」は現代イランの混沌や閉塞感を的確に捉えている。「イスラム離れ」が急速に進んでいると著者が指摘するように、イラン人自身が見捨てようとしている自由の少ないこの国で、著者は「シンプルに生きる」ことを学んだと述べて本書を締めくくっている。イランはどこへ向かうのか。横丁の人々は四〇年になろうとする革命体制の先に、何を見いだすのであろうか。著者がイランを再訪する暁には、ぜひモストウフィー横丁へ帰省してもらいたい。

